満月の夜

LES NUITS DE LA PLEINE LUNE

1984年 フランス映画 カラー 1時間42分

1984年度ヴェネチア国際映画祭主演女優賞

提供＝ユーロスペース

宣伝協力＝㈱シネセゾン

監督・脚本：エリック・ロメール ERIC ROHMER

撮影：レナート・ベルタ RENATO BERTA

主演・装飾：パスカル・オジエ PASCALE OGIER

衣裳：ドロテ・ビス DOROTHEE BIS／マリー・ベルトラミ MARIE BELTRAMI

主題歌：リュシエンヌ・ボワイエ LUCIENNE BOYER『愛の星』L'ETOILE D'AMOUR

24才の若さで急逝した女優

パスカル・オジエが見せる

新しい愛のかたち

私を愛しすぎないで

満月の夜
LES NUITS DE LA PLEINE LUNE

1984年 フランス映画 カラー 35ミリ スタンダード 1時間42分
1984年度ヴェネチア国際映画祭主演女優賞
提供＝ユーロスペース
宣伝協力＝㈱シネセゾン

スタッフ

監督・脚本――エリック・ロメール ERIC ROHMER
撮影――レナート・ベルタ RENATO BERTA
装飾――パスカル・オジエ PASCALE OGIER
編集――セシール・ドキュジス CECILE DECUGIS
ルイーズの衣裳――ドロテ・ビス DOROTHEE BIS
カミーユの衣裳――マリー・ベルトラミ MARIE BELTRAMI
音楽――エリとジャクノ ELLI et JACNO
主題歌――リュシエンヌ・ボワイエ LUCIENNE BOYER『愛の星』L'ETOILE D'AMOUR
製作――マルガレット・メネゴス MARGARET MENEGOZ
LES FILMS DU LOSANGE／*LES FILMS ARIANE*

キャスト

ルイーズ――パスカル・オジエ PASCALE OGIER
レミ――チェキー・カリョ TCHEKY KARYO
オクターヴ――ファブリス・ルシーニ FABRICE LUCHINI
バスチアン――クリスチャン・ヴァディム CHRISTIAN VADIM
カミーユ――ヴィルジニー・テヴェネ VIRGINIE THEVENET
カフェの絵描き――ラズロ・サボ LASZLO SZABO

静止する大気の中で
梅本洋一

1950年代の前半、30代に達した男がパリのカルチェ・ラタンの小さなホールで行われているシネクラブで映画の紹介をしていた。彼は高校の古典文学の教師をしており、このシネクラブで上映する映画も、彼の生徒たちがどこからか借りてきたものだった。参加者の中には、やっと20代に到達したばかりのフランソワ・トリュフォーや、ジャン＝リュック・ゴダールや、ジャック・リヴェットがいた。このシネクラブの名称はシネクラブ・ドゥ・カルチェ・ラタン。司会の高校教師はエリック・ロメールだった。ヌーヴェル・ヴァーグの開始にはもちろん様々なきっかけがあった。アンリ・ラングロワのシネマテークがあったし、映画批評家アンドレ・バザンもいた。だがこのシネクラブも、ヌーヴェル・ヴァーグを用意する重要な出来事だった。

それから30年以上経った。フランソワ・トリュフォーはすでにこの世にいない。ジャン＝リュック・ゴダールは今なお、宙空をさまよい続けている。ジャック・リヴェットは映画を撮ることの苦痛と快楽に身をゆだね続けている。彼らの長兄とも呼べるエリック・ロメールは唯一人順調に映画を撮り続け、数少ない例外を除いて多くの観客がロメールの映画を見続けている。トリュフォーなき後、ロメールが一番の支持を受けているのだ。

だが彼の映画を見るのは、ある者にとっては苦痛であり、ある者にとっては快楽でもあるだろう。静止するキャメラ。数多い台詞。取るに足らぬ誤解から生じるそれほど起伏のない物語。ヌーヴェル・ヴァーグの多くの作家たちに見られるような映画愛好家的引用は彼の映画には全くない。映画は現実を写す、という単純素朴な信仰に近い方法論がそこにあるだけだ。今回公開される『満月の夜』にもその方法は当てはまる。今度舞台になるのは、あの『海辺のポーリーヌ』の夏のノルマンディの海岸の陽光ではない。暗さが支配し、石と壁と夜ばかりの真冬のパリである。登場人物として映画に置かれるのも、これから思春期を迎えるはずの、はつらつとした中学生の少女ではなく、すでに20代を迎え人生について少しは思考したこともある女性(パスカル・オジエ)である。そして、ノルマンディの残り少ない夏を静止したキャメラでじっと見据えたネストール・アルメンドロスの映像ではなく、素早く透明な冷たさを捕える力を持つレナート・ベルタの眼がこの映像をつくったのである。

40歳ではじめて長篇第一作(『獅子座』60年)を撮ったロメールの映像には、最初からすでにヌーヴェル・ヴァーグ的瑞々しさは排除されている。密やかな成熟した視線が静かに、そして残酷に登場人物と街を見つめ続けている。私たちは、映画のこうした視線をかつて感じたことはなかったか。もし一度でも冬のパリを訪れた人なら、『満月の夜』のあの冷たい空気を感じるはずだろう。まだ薄暗い早朝のカフェでパスカル・オジエとラズロ・サボがしたような会話を耳にしたこともあるだろう。スタジオで撮影されたハリウッド映画からは、少なくとも私たちは、こうした空気とこうした光とこうした音を体験したことはなかった。現実から映画を引き出し、現実から美を発見し、映画を見る快楽を見に、映画を聴く密かな歓びをロメール映画によって味わう私たちは、どうしても思い出さねばならない。

そう、あのロベルト・ロッセリーニである。ゴダールが、「事態を的確かつ総体的に把握する視点を持った」映画作家と呼んだロッセリーニ的映画の系譜を、ロメールの中に確実に見つけ出すことができるのだ。単純で素朴な映画程困難を伴うものはない。一瞬の光を、一瞬の空気を的確に映像で記述しなければならないからだ。『満月の夜』も、絶対的に「現代的」であろうとするエリック・ロメールが天啓を受けた映画作家ロッセリーニの痕跡を確実にとどめている。そして、私たちは、今一つの記憶にも思いをめぐらせなければならない。『満月の夜』でヴェネチア国際映画祭主演女優賞を得たパスカル・オジエの記憶である。彼女は、この映画がフランス公開されてから二か月後に亡くなった。パリの冬の空気とそれを呼吸していたパスカルと、彼女の奇妙な発声が、『満月の夜』のレアリズムを強調している。こうした映画は美しいと呼ぶ他言葉が見つかりはしないのだ。

◉あらすじ

ルイーズは、いつも恋している。〝愛されすぎること〟に耐えられず、また別の恋を探す。独占的な愛情にしばられるのはまっぴら。相手をより愛し、より強く求めるために、ルイーズは独立したひとりの女でいたいのだ。

ルイーズはレミと一緒に暮らしている。二人は愛しあっているが、性格は正反対。夜遊びにつきあってくれないレミのかわりに、ルイーズはオクターヴという男を見つける。

ルイーズは、男を誘惑するのが大好きだ。オクターヴがとめるのもきかず、パーティーで知りあったバスチアンと一夜を過ごす。

後悔したルイーズはこっそり、まだ薄暗い通りに抜け出しカフェで始発電車を待つ。奇妙な絵描きがルイーズに話しかける。「今夜は満月だ」。

朝、部屋にレミはいない。おくれて帰ったレミがルイーズに打ち明ける。「ゆうべ、僕はある女性と一緒だった。僕は彼女を愛している。」

新春第2弾 1月中旬よりロードショウ

特別鑑賞券1,200円発売中

(当日一般1,500円、学生1,300円のところ)
当劇場窓口、都内各プレイガイド、チケット・セゾン、
チケットぴあ、セゾン系各劇場ほかでお求めください。

●上映時間(自由席定員制・入替制)

連日	12:30	2:40	4:50	7:00	9:10

夜9時10分の回にご来場の方には
ペパーミント・ソーダのサービスがあります。

●ロメール監督作品『緑の光線(仮題)』(シネセゾン配給)、『モード家の一夜』(ユーロスペース配給)も公開決定。

CINE VIVANT
シネ・ヴィヴァン・六本木
地下鉄六本木駅下車・1番出口・WAVE地下1階
お問い合せ tel.(03)403-6061